

【船橋地区】

家庭科で学ぶ金融教育と新学習指導要領下での3観点評価

— 家庭科教育法の視点を踏まえて —

1 はじめに

今年度、新教育課程がスタートし、1年次に家庭科が教育課程にある学校は評価に関して試行錯誤で前期成績を確定したであろう。また、株式、債券、投資信託などの基本的な金融商品の特徴なども家庭科で教えることになると報道が目立つようになり戸惑う部分もあった。このことから、第1回目の地区研究会で話題となった上記2つのことに対して第2回目の地区研究会のテーマを設定した。

2 研修計画

(1) 令和4年5月24日(火) 研究協議・テーマの決定

(2) 令和4年7月28日(木) 研修会 [会場：和洋女子大学 南館9階 大会議室]

講師：和洋女子大学総合研究機構家庭科教育研究所 工藤 由貴子 氏

3 研修内容

(1) 講義

①家庭科で学ぶ「金融教育」

枠組み1 課題解決を超えてより良い生活を求めていく

例①18歳成年

一般的な解釈：契約のリスク、トラブル回避、契約の取り消し

家庭科の考え方：被害者にも加害者にもなりうることを、被害者・加害者にならないために

例②資産形成

一般的な解釈：うまく、出来るだけ多く資産を増やす、お金を儲ける

家庭科の考え方：どういうライフスタイルを築きたいか、その実現のために経済的な課題は何か
何に投資するか、どういう「資産」を増やしたいか

枠組み2 「家庭科で行う」ではなく、「家庭科を行う」

方法1 小中高等学校の積み上げを大切にする。

方法2 学習題材としてどの領域で実施するか考える。

家庭科の金融教育は、家庭科の目標である「よりよい生活をつくるため」の知識・技能を身につけることを目指して行われる。衣食住のどの単元でも金融教育は、実施出来るのではないか。

例：どの単元においても「お金」の場合の「よりよい生活」って何か？という問いを生徒自ら問い続けられることが大切である。→今の評価へと結びつく。(主体的に学習に取り組む態度)

方法3 社会的課題に関する知識、現状をみて課題をどこに見出すかに家庭科の視点を常に光らせる。

方法4 家庭科として教えるべき学習内容と子供の達の状況、関心、経験を合わせた教え方を工夫する。

例：単元ごとに目標を決めさせる→終わった後の気づき、今後の目標、どう変化したかなど書かせる。
→今の評価へと結びつく。(思考・判断・表現)

②新学習指導要領下での3観点評価

評価とは：「生徒にどういった力が身についたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにする。
→よりよい授業を作っていく上での評価となる。

○高等学校における評価方法・・・内容をまとまりごとに評価基準を作成する場合

例：C 持続可能な消費生活・環境 (1) 生活における経済の計画

ア 家計の構造や生活における経済と社会との関わり、家計管理について理解すること。

知識及び技能に関する内容 十分に習得している・理解できている

イ 生涯を見通した生活における経済の管理や計画の重要性について、ライフステージや社会保障制度などに関連付けて考察すること。

思考・判断・表現力に関する内容 工夫・考察しようとしている態度

レポート作成・発表・グループ話し合い・実習・製作・表現などで評価

ポイント主体的に学習に取り組む態度については、生徒の学習への継続的な取り組みを通して見ることができるので「内容」に記載がない。指導要領に記載の「目標」を参考にしつつ、生徒の興味・関心・学習経験などを考慮して作成すると良い。尚、現在を起点に生涯を通して、家族・家庭や地域、社会の課題を発見しその解決に取り組む姿勢や学習過程を振り返ることができたかどうか単位ごとよりかは継続的なことで判断するのがより良い評価へとつながる。

4 考察

(1) 家庭科で学ぶ「金融教育」の考察

新学習指導要領のもとで、「金融教育」が求められる背景を検討し、家庭科で学ぶ「金融教育」は従来の家庭科の内容に新しい学習題材を加えることではない。そのことを再認識できた。これまで行ってきたことをより家庭科らしく行うことが大切である。金融教育を「家庭科で行わなければならない」とどこかで思っていたが、金融教育は「家庭科を行うことで学べる」そういった授業展開へと考えられるきっかけとなった。

(2) 新学習指導要領下での3観点評価の考察

従来の評価だと覚える学習に過ぎなかった。「教える・学ばせる」から「伝える・一緒に考える・生徒が変わる」を見とれる大転換を踏まえた評価である。今後の課題として、単元の目標に照らして評価基準を想定し、そこから指導計画を作るようにしていくこと。また、生徒自身の学習課題を共有し、一人ひとりがそれに対するアプローチができているか見て分かる評価でなければならない。従来より生徒、教員共に学び合う姿勢が大切だと考えさせられた。

5 おわりに

新たな評価をしなければならない・新たな金融教育をしなければならないと漠然としていた中、今回の研修で今までをより充実させることを再認識しました。「家庭科を行う」ことを大切にしながら生徒と共により良い授業が作っていけるように日々学んでいきたいと思えます。

最後にこの研修の準備や講義・会場にご尽力頂いた和洋女子大学の「家庭科教育研究所」の皆様、「高大連携支援室」の皆様に深く感謝申し上げます。